

コメディリック第2回「ただのホラー」

「海の声」

登場人物

白石 シロスコフ

齋藤 野彦

吏子 テオ・ポー

※齋藤、白石、板付き

【し・明転】

ビーチで海を眺める二人

齋藤 「日も暮れてきたね…」

白石 「そうだな…」

齋藤 「夕焼け綺麗だな」

白石 「…齋藤…そろそろ二の腕いいかな？」

齋藤 「（手を離して）あ、ごめん！」

白石 「そんなに気持ちよかった？」

齋藤 「え？」

白石 「俺の二の腕、そんなに気持ちよかったですか？」

齋藤 「あ…うん…気持ちよかった」

白石 「（嬉しそうに）太っててよかった」

齋藤 「あ、いや、太ってるとかじゃなくて、

白石だから、だと思う」

白石 「え、それ、どういうこと？」

ちよっと良い感じになる二人

白石

「お、俺、最後に海の家の大したことない焼きそばとかラーメンとかをありがたがって食い溜めしてくるわ！」

齋藤

「お、おーいいね！」

白石

「女がいなくても、太ってて水着になれなくても、海の楽しみ方はある。ご飯だけはいつだって俺たちの味方。ありがたいな」

齋藤

「ありがたいね」

白石

「お前も行く？」

齋藤

「いや、俺はもう少し海を眺めてるよ」

白石

「そうか。齋藤、迷った時は海に聞け。きつと教えてくれる「お前はブス」ってな」

齋藤

「…うん。ありがとう」

にこやかに去る白石

じっと海を眺める齋藤

少し離れたところに吏子がやってくる

最初は何も気にしていない齋藤だが徐々に吏子のことが気になって気が気じゃない様子が見取れる

齋藤 「(自分の顔を両手で叩く) ダメだ」

「SE・白石の言葉」

白石 M 「全て諦めろ…全て諦めろ…全て諦めろ…
…全て諦めろ…全て諦めろ…全て諦めろ」

白石の言葉を必死に思い出して自分を抑える
齋藤

齋藤 「そうだよ。全て諦めなきゃ」

それでも、どうしても気になる齋藤

齋藤 「ああ、海よ。海よ。教えてくれ」

海に問いかける齋藤

「SE・海の声①」

海の声 「頑張れ」

海の声にはつとずる齋藤

齋藤、わざとスイカのボールを吏子にぶつける

齋藤 「あ、すいません。風が風が」

吏子 「…いいえ」

齋藤 「…何をしてるんですか？」

吏子 「…海を眺めてました」

齋藤 「…僕も海を眺めるの好きです…」

吏子 「…何も考えずにいられるんです」

齋藤 「…僕も同じです」

吏子 「…でも何もかも考えることもできるんです」

です」

齋藤 「…僕も同じです」

吏子 「…何も考えてないように何もかも考えて何も考えてなくない」

「…僕も同じです」

吏子 「…でも考えるって苦しい。届かない人の事ならばなおさら。どうして苦しいの

に考えてしまうんでしょうね」

「…そうですね」

齋藤 「…星の王子さまは星にいるから、私が

地球にいるうちは届くことは無いんだな

あって」

「…そうですね」

齋藤 「…もしも銀河鉄道がおついたら片

道の切符だけ持って迷わずに乗り込ん

だ。お気に入りの帽子と細長あああいたバコだけカバンに忍ばせて」

「…そうですね」

「…そのまま星を巡る旅に出るの。水星で泳いで火星ではB B Q。金星はカジノで遊んじやう。土星では泥遊び」

「…そうですね」

「…それでもあの人のことが忘れられなかったら列車ごと太陽に飛び込んで燃えて無くなりたくない。私って日焼けしやすいじゃないですか？多分、それは太陽で身を焦がす宿命の女として生まれたからなんだろうなって」

少し離れる齋藤

「…自信なくなってきた…」

[S.F.・海の声①]

海の声 「頑張れ」

海の声にはっとする齋藤

齋藤 「はっ。ありがとう、海。俺頑張るよ」

吏子の傍に座る齋藤

「…燃えて無くなるなんて言わないでください」

「…じゃあ、私は流れ星になってあの人の上を落ちていく。一瞬だけでもいいからあの人の上で輝きたい」

「…今でも輝いています」

「…そして私は星座になるの。でも星座って誰かに見つけてもらわないと名前が貰えない。だから、私は待つ。宇宙の海で一人。名前を付けてもらえるまで」

「じゃあ、僕が名付けます」

「…私は何座ですか？」

「…おとめ座」

「…おとめ座あるじゃん」

「ちなみに私はてんびん座。でも今はそんなこと関係ない。誰も私を理解してくれない」

「僕が理解します」

「私の事、わかってくれますか？」

「はい。もう全てわかります」

齋藤

吏子

齋藤

吏子

齋藤

吏子

齋藤

吏子

齋藤

齋藤

吏子

齋藤

吏子

「…宇宙の海で一人ぼっちの私は釣りを
する。色んな魚を釣る。鮭、さんま、カ
ツオ…ヤダ私って食いしん坊。食いしん
坊座。そうかー私って食いしん坊座なん
だーって。待てない私は自分で名づける
の。だから…寂しい…私の事、わかって
くれますか？」

齋藤

「はい。もう全てわかります」

吏子

「ふふ。嬉しいなあ」

ぐすんぐすん泣き出す

齋藤

「大丈夫ですか？」

吏子

「これは嬉し涙、最近弱ってたから」

白石が戻ってくる

白石

「おい！齋藤！何やってんだよ！」

齋藤

「あ、いや」

白石

「ダメじゃん！女性と接したら！地獄に
堕ちるぞ？」

「…あの人は違う」

齋藤

「はあ？」

白石

「あの人は違う。あの人はいける…弱っ
てるから」

齋藤

「はあ？」

白石

「お前さあ…弱ってるなら尚更他の男が
いくんだよ！俺らの出番は一生無いか
ら！食物連鎖の一番下なんだよ？自覚し
ろ！ちゃんと、全て諦めろ」

齋藤

「そんな風に言わないでよ」

白石

「口答えするのか？腕力に物言わせる
ぞ」

齋藤

「白石、さっき、俺といい感じだったか
らヤキモチ妬いてるんだろ」

白石

「確かにさっきお前が長時間、俺の二の
腕を触るせいで良い感じになっちゃった
けど、お腹いっぱいになったから今は冷
静です。どうかしてた。齋藤、お前のた
めを思って言ってる。全て諦めろ」

齋藤

「海が！…海が言ってくれたんだ。頑張
れって」

白石

「そんなわけないだろ」

齋藤

「本当なんだ…海よ。海よ。教えてく
れ」

海に問いかける齋藤

「SE・海の声①」

海の声

「頑張れ」

白石 「…本当だ」

齋藤 「白石、悪いけど、今はお前の言葉よりも海の声信じたい」

白石 「齋藤…」

齋藤 「さつき同調して、全て諦めると言った

けど、前言撤回させてもらう。俺は行く。あの弱ってる女の人をいつてみる」

白石 「…わかった。どういう結果になろうと自分を見失うなよ」

齋藤 「うん」

白石 「弱ってる内にほら」

白石に促されて吏子に声をかける齋藤

齋藤 「あの…」

吏子 「見えないものを見ようとして望遠鏡をのぞき込んだ。…私って見えないものなんだあ。あの人には見えない存在。見えない星。いや違う。星は見えるから星。辛いからキムチ。怖いから淳二。稲川。寂しい。…私の事わかってくれますか？」

熱唱する齋藤

齋藤

「海の声がく知りたくてく君の声をく探してるく君の事がく知りたくてく僕はく君をく見つめてるく」

驚いた様子の吏子

齋藤

「あなたの声を僕に聞かせてくれませんか？苦しみでも怒りでも何でもいいです。必ず笑い声に変えてみせます」

すすり泣く吏子

齋藤

吏子

「大丈夫ですか？」
「…これは…悔し涙…私、こんな感じの人に言い寄られるほど、自分の価値が落ちたんだなって…」

間

吏子

「（嗚咽して泣きながら）なんで…そんなに私が傷つくようなことが…言えるんですか？…ちゃんと考えればわかりますよね？…あなたに声をかけられたら女性が傷つくって…時代が…違ったら…捕まっていますよ？…もう平成も終わりますよ」

…？これ以上…私を傷つけないでください
い…寒くなってきた…」

その場を泣きながら去る吏子

白石
「…齋藤」

〔SE・海の声②〕

海の声
「ケラケラケラケラケラケラ…！」

白石
「海が…笑ってる…」

齋藤
「騙したなああああ！」

〔SE・海の声③〕

海の声
「お前はブス」

齋藤
「海いいいいいい！」

〔L・暗転〕

—了—